

【最優秀賞】

ブラジル人のミラクルピラ配り

吉川 結衣（岐阜県 岐阜県立大垣北高等学校 2年生）

もう夕暮れ時だというのに、彼はまだそこに立っていた。私が店長と一緒に開店準備をし始めた朝十時、そのときにはすでにいたから、最低でも七時間は立ち続けていることになる。

「あの人、大丈夫でしょうか」

店内からちようどお客さんがいなくなったところで、窓際の机を拭いていた店長に問うてみる。

「あの人って」

「あのんです」

指をさすのはなんだかはばかられて、手のひらで窓の向こうの彼を示す。

道路を挟んだ向かいにあるブラジル料理屋『ミラーグリ』の前で、ピラ配りをしているのが彼だった。肌は黒く、目鼻立ちははっきりしていて、見るからに日本人ではなさそうだ。

「ああ、あの入」

店長は笑った。髪の毛の半分はもう白髪だけれど、そうやって笑う

と二回りくらい若返る。

「そうか、宮子ちゃんは初めて見るのか。大丈夫だよ、なんせ彼はミラクルなブラジル人だから」

戸惑う私に、店長はもう一度、「大丈夫だよ」と笑った。

ミラクルなブラジル人は、私のシフトが終わる時間になってもまだピラを配っていた。せっかくの日曜日なのに、こんなことをしていいんだろうか。

——道路を一本挟むだけで、地球を半周できる。

私がアルバイトを始めた和食屋『奇跡』と、彼のいるブラジル料理屋『ミラーグリ』、二つの料理屋を合わせた宣伝文句はそれだった。それがあまりに強烈で、隣町に住む私でさえ、以前から二店のことを知っていた。

だけど、実際店に入って食事をとったのは、その日が初めてだった。入ったのは、『奇跡』のほう。ブラジル料理に手を出す勇氣は、女子高生の私たちにはなかった。

「宮子、ここでバイトさせてもらいなよ」

一緒に店に入ったクラスメイトの友達は、軽い調子で言った。ざるそばをすすつとすすつて続ける。

「お金ないって言ってたじゃん、バイトすればいいよ。この店、なんか宮子っぽいよ」

和食屋を「私っぽい」と言いたくなるのは、よくわかった。「宮子」なんて名前に、純日本人な顔立ち。少なくとも、向かいのブラジル料理屋に入ればとんでもなく浮いてしまうような。

「修学旅行、楽しもうよ。お金のことなんて気にしたら、お土産買えないじゃん」

「そうだね……」

そもそも、この日二人で隣町まで出かけたのは、二ヶ月後に控えた修学旅行用の服を買うためだった。おかげで、今日から夏休みだというのに、私の財布はかなり軽くなってしまっていた。

「前から気になってたんだよね」という彼女の言葉につられて入ったこの店が、学生にも優しい値段の和食屋で、本当に助かった。

「あ、もしかして、バイト来てくれる？」

デザートのわらび餅を持って来てくれた店長が、私に笑いかけた。

「お小遣い稼ぎの短期バイトでもいいよ。よかったらおいで」

家から遠いという難点はあったものの、短期でいいという言葉に惹かれ、店長の人柄にも惹かれ、友達にも勧められ、ここで働かせてもらうことにした。

夏休みなのに電車に乗ってここまで来るのは大変だけど、『奇跡』でのバイトはそんな大変さを忘れさせてくれるくらい楽しい。落ち着いた雰囲気のある和食屋だからか、トラブルが起ることもほとんどない。

何しろ、店長をはじめ、先輩アルバイトさんも、常連のお客さんも、みんな優しくかった。

最初の一週間は平日だけ働いていたものの、あまりに楽しいから、土日にもシフトを入れてもらうようになった。初めての日曜日バイトだったこの日、私は彼を見つけたのだった。

店長と先輩アルバイトさんに「お疲れさまでした」と声をかけ、店を出る。

まだ日も沈んでいないし、お店は夜まで続く。申し訳ないなど思うけど、高校生は一日八時間までしか働けないと、労働基準法

だとかで決まっているらしい。仕方がない。

そのまま駅に向かおうとしたものの、ふと思いついたことがあった。車が来ないのを確認し、道路を横断する。私は、地球を半周した。

ブラジル料理屋『ミラグリ』の前で、彼はまだピラ配りをしている。近づいたら、彼も私に気づいてくれた。

「よかったら、食べに来てください」

彼の日本語は、思いのほか流暢だった。彼が差し出すピラは、『ミラグリ』の宣伝チラシ。

『ブラジル料理屋「ミラグリ」、お客様にミラクルな味を提供いたします！

Restaurant brasileiro 'Milagre' vamos oferecer-lhe um sabor milagroso!』

日本語の下に並んでいる文字は、ブラジルの公用語のポルトガル語だろう。

「ありがとうございます」

大切に受け取った。貴重な日曜日を潰してまで彼が配るこのピラが、なんだか特別なもののように思えた。

バイトを始めて一ヶ月も経つころには、目標金額を優に超えていた。もうすぐ夏休みが終わるし、いつ辞めてもお土産代には困らないし、いつ辞めてもいいと、店長からも言われていた。でも、このバイトを辞めようとは思えなかった。修学旅行のための短期バイトのはずだったのに。楽しくて、やりがいもあって、お金のことは二の次になっていた。

それに、毎週日曜日にはブラジル人がピラを配っている。窓越しに彼を見る度、自分も頑張らなくてはと元気をもらえた。本当

に、タフでミラクルな人だ。

「よかったら、食べに来てください」

日曜日のバイトが終わると、私は必ず彼のピラをもらいに行つた。いつも同じ内容のピラなのだけだ。

「ありがとうございます」

いつものように受け取ったら、あの、と声をかけられた。顔を上げると、彼の顔には笑みが浮かんでいた。

「あなた、『奇跡』で働いてる方ですよ」

日本人だと言われても疑われないほどの、自然な日本語だった。

「そうですが……」

どうしてわかつたのだらうと首をかしげる私に、彼は説明してくれた。

「ここでピラ配りしていると、『奇跡』、よく見えるんですよ」

「そうなんです」

「受け取ってくれる人がいなくて落ち込みそうになっても、『奇跡』の店長さんたちが働いてるのを見て、僕も頑張らなきゃって思うんです」

彼はそんなことを言っていて笑った。私こそがそうだったのに。私こそ、ピラ配りをする彼の姿に元気をもらっていたのに。それにしても、正反対の場所に位置するはずの日本とブラジルがこんな風に影響し合っているなんて、なんだか不思議だった。

彼の仕事の邪魔になってしまうことに気づき、それじゃあ、と別れを切り出す。

「ピラ配り、頑張ってください」

「はい、ありがとうございます」

日本人より丁寧なお礼を受け取って、駅に向かって歩を進め

た。

八月の夕焼け空は、秋の予感を携えていて、綺麗だった。赤い夕陽が、地球を優しく照らしていた。

「宮子ちゃん」

洗い物をしていたところで、店長に呼ばれた。日曜日だけど、中途半端な時間帯のため、夕方の店内にお客さんの姿はない。

「そろそろ終わりだよ。残りの洗い物は僕がやるから、もう帰っていいよ」

「すみません、ありがとうございます」

シフトの時間内に仕事を終わられない私は、まだまだ未熟なアルバイトにすぎない。これからもここで働き続けたら、いつか店長や先輩アルバイトさんのように、手際よく仕事を片付けられるだろうか。それまでは、ブラジル人の彼のように地道に頑張るしかない。

「宮子ちゃんって本当に真面目だよ」

手を洗っていたら、店長がそんなことを言っていて微笑んだ。その笑顔で、二回り若返る一方で、目尻にはしわができていた。

「真面目だし、いい子だし。宮子ちゃんが来てくれて、本当によかったよ」

あまりに急で、さすがに戸惑った。何かあったのだろうかと不安になる。私の不安もよそに、店長は続けた。

「そんな宮子ちゃんには、言いくいんだけさ」

店長の笑みは、どこか寂しい。目を逸らしたくなかったけれど、その前に、店長の口が開いた。

「今月いっぱい、もう来なくてよくなるから」

「……どういう、ことですか」

聞き返すと、店長は笑みを深めた。寂しさも、一緒に深まってきたような気がした。

『奇跡』、閉店することにしたんだ』

店長が口にした言葉は、『奇跡』の店内にまったく馴染んでいなかった。四方、どの壁にも吸い込まれることなく、頼りなげに空中を浮遊する。

『短期バイトでいいって言ったの、そのせいなんだ。ごめんね、そのときに言えばよかったよね』

『いえ……』

店長に謝らせてしまったことが申し訳なかった。夏休みの間で辞めるつもりだと、最初に言ったのは私だ。なのにここを気に入ってしまった、夏休みが終わっても働き続けようとしていた。

なんて、自分勝手だったんだろう。

こんな日曜日だったから、ピラをもらうことなく駅に向かった。

こんな日曜日だったのに、夕空の茜色は相変わらず優しくかった。

地球を半周できる二つの料理店のうち、地球の裏側だけを残して、日本の店は今月いっぱい閉店する。九月三十日、『奇跡』閉店の日は、私の修学旅行とかぶっていた。

よかった、かもしれない。『奇跡』の最終日に、未熟な新人アルバイトがいたら邪魔だろう。店長や常連のお客さんたちだけで、最後の時間をゆっくり過ごすべきだと思う。

私が最後にバイトに行ったのは、修学旅行の前日の日曜日だった。

着替えとか、洗面用具とか、準備しなければならないものがま

だ残っているのに、私はこの日も『奇跡』に来て、机を拭いていた。ブラジル人の彼も、やはり変わらずピラ配りをしていた。

『これから、どこで昼飯食おうかなあ』

常連のお客さんは名残惜しそうに言いながら、店長特製の親子丼を食べている。店長は笑って、

『向かいのブラジル料理屋、行ってみたらいいじゃないですか』

『まあそうだけとさ、ちょっと勇気が足りないというか。やっぱり、店長の和食の味が、一番なんだよ』

お客さんがそんなことを言うから、本当にこの店はなくなってしまうんだと、今一度思い知らされる。

ただのお小遣い稼ぎのはずだったのに、私はすっかりこの店が好きになってしまっていた。何かに愛着を感じることも、こんなに自分を苦しめることになるなんて、これまでは微塵も思わなかった。

『ねえ店長、なんで閉めちゃうの。まだまだお客さん来るでしょ』

未練がましい口調で言うお客さんに、店長は『残念ながら』と首を振る。

『そうでもないんですよ。年々お客さんは減ってますよ。それに、私ももう歳ですから』

諦めたような店長のその口調を聞いていると、私まで悲しくなってしまう。

若く見えるけれど、店長は『もう歳』と言うに充分の年齢だった。自身の年齢と経営不振により数年前から閉め時を思案していたが、今年ついに踏み切ったのだという。

私は、全然そのことに気が付かなかった。この店はいつまでも営業し続けるのだと、無条件に信じていた。

「寂しくなるね」

お客さんは言った。本当に寂しそうだだった。

二人の会話を聞きながら、ずっと同じ机を拭き続けてしまっていたらしく、

「宮子ちゃん、そこ、もう充分綺麗だよ」

店長に指摘されてしまい、「すみません」と慌てて、頭を下げる。

お客さんにも笑われてしまった。さすがに情けない。

ブラジル人の彼は、真面目にピラ配りをしているというのに、私は全然駄目だった。

最後のバイトが終わる時間になり、いつもの「お疲れさまでした」を店長に言って、店を出た。

地球の裏側では、彼はまだピラ配りをしている。いつもと同じように。

当たり前だ。日本は閉店するけど、ブラジルは変わらず営業し続けるのだ。

この辺りに来ることもほとんどなくなるだろう。記念に、最後のミラクルなピラをもらいに行くことにする。

道路を渡って地球を半周すると、彼はすぐに私の姿に気づいてくれた。

「よかったらどうぞ」

「ありがとうございます」

ピラを受け取る。そこには、以前もらったものとは違うことが書かれていた。

『奇跡』閉店につき、「ミラークリ」も大サービス中！

Com 'Kiseki' fechado, 'Milagre' também esta passando por um ótimo service! ~』

『ミラークリ』はこれからも変わらず営業し続けるのに、『奇跡』のことを意識してくれているのが嬉しかった。なんだか、とても嬉しかった。

同時に、寂しくもなる。これからは、『ミラークリ』だけになるのか。

『奇跡』、閉店しちゃうんですよね」

彼は真つ黒な眉毛を下げ、ピラを見た。おそらく、『奇跡』閉店』の部分です。

『そうみたいです』

やっぱり、まだ少し実感がなかった。道路の向こうに視線を向けると、窓の向こうで、店長がお客さんと話している姿が見える。

ああ、そうか。もう、店長と会うこともないのだ。店長があまりにいつも通りだから、いつも通りの挨拶しかしてこなかった。

そのことを後悔するのも束の間、
「どうしてくれるんですか」

その声に、思わず彼に顔を戻した。彼のコーヒー色の顔には、半分の怒りと、半分の冗談が混ざっていた。

「どうしてくれるんですか。『奇跡』がなくなったら、『ミラークリ』だけになっちゃうじゃないですか。そしたら、地球半周、できなくなっちゃうじゃないですか」

どうしてくれるんですか、なんて、私に言われても困る。そんなことは、彼だつてもちろん承知の上だろう。

だから、私は私なりに考えた。『奇跡』がなくなっても地球を回れる方法を。

そして、思いついた。

「大丈夫です」

彼に一言そう告げて、『ミラーグリ』の周りを回る。ぐるっと一周。

元の位置に戻ってきた私を、彼は不思議そうな目で見ていた。説明を、試みる。

「こうやって『ミラーグリ』を回れば、ブラジルからブラジルに行ったことになります。地球を一周したってことです。今まで、ブラジルと日本の半周だったのに、倍の一周ですよ」

「とつてもくだらないことを言っていると、自分でも思う。だけど、彼は笑ってくれた。」

「本当ですね。地球、一周できますね」

ミラクルなピラを配るブラジル人は、どこまでも優しくかった。居心地がよくて、つい立ち去れなくなってしまう。

彼は道行く人にピラを渡し、人の流れが途切れたところで、おもむろに口を開いた。

「実は、ピラ配り、仕事じゃないんです」

「……え」

「ボランティアみたいなのなんです。だから、こんなに真面目に配る必要はあんまりないんです」

「はは、と彼は自嘲するように笑った。」

「僕ね、平日は料理の専門学校に通ってるんですよ。土曜日は『ミラーグリ』の料理を少し手伝わせてもらって、日曜日はピラ配り。バイト代なんて出ないんです、ここを営業してるの、僕の親戚だから」

人が通ればピラを配りつつ、彼は自分の話をした。し続けた。私に、相槌を打つ暇も与えないほど。

「だけど『奇跡』を見ていたいから、ずっとここに立ってピラを配ってるんです。僕、本当は『奇跡』で働きたかったんです。顔

に似合わず、日本料理が作りたかったんですよ。学校や『ミラーグリ』で修行を積んで、『奇跡』の店長さんに認められるくらいの料理人になってから、この厨房で働かせてくださいって直談判に行こうと思ってたのに、間に合いませんでした」

「どうしてくれるんですか、と、彼はもう一度言った。彼の声にも言葉にも、未練ばかりが詰まっていた。」

「店長さんは、僕の存在にすら気づいてなかったかもしれないね」

「そんなことはないです」

「ようやく口を挟むことができた。彼は私の顔を見て、首をかしげる。」

「店長は、あなたのこと、ちゃんと気づいてましたよ。『彼はミラクルなブラジル人だ』って、私に教えてくれたんです」

「事実を伝えただけなのに、彼はか上げた首を、今度は前に深く倒して、『ありがとうございます』と言った。」

誰よりも丁寧で、タフで、ミラクルなブラジル人だった。

修学旅行は、沖繩へ行く。飛行機に乗って、日本の最南端に行く。

飛行機で数時間を使っても、せいぜい日本の端っこまでしか行けないのだ。道路を一本挟むだけで地球を回れるあの店たちは、本当にミラクルだった。

沖繩のお土産屋さんで、『奇跡』でのバイトで稼いだお金を入れた財布を眺めながら、そうだ、と思いついた。

ミラクルなブラジル人にお土産を買っていいこう。『奇跡』が

なくなっても、彼がビラを配り続けられるように。
彼が、地球を回り続けられるように。